

平成 25 年度 海外臨床薬学研修報告書

「USC 海外臨床研修に参加して学んだこと」

研修期間：平成 26 年 2 月 22 日～3 月 9 日

研修先：南カリフォルニア大学薬学部

薬学部薬学科 5 年

090973135

鈴木 絢子

1 週目

2月24日(1日目): オリエンテーション

- ・ 現役学生による南カリフォルニア大学本学キャンパスの散策ツアー
- ・ 現役学生による薬学部キャンパスの散策ツアー
- ・ Wincor 先生による「南カリフォルニア大学について」「アメリカと日本の薬学教育制度の違い」の説明
 - …カリフォルニア南部の薬剤師のほぼ半数は南カリフォルニア大学卒業生が占め、地域医療に貢献している。
 - 日本の薬学部は6年制であるのに対し、アメリカは3,4年制の他大学で基礎教育を学び卒業した後に4年制薬学部に入るため、薬剤師になるまでに最短7,8年を要する。また、学費も非常に高額である。(南カリフォルニア大学薬学部の学費は名城大学の約2倍)
 - 目的別、民族別の学生主体のコミュニティーが多数あり、健康教室、子供教室などを開催し学生のうちから地域医療に貢献している学生団体もある。
- ・ 学生証の取得
- ・ 現役学生とのウェルカムパーティー

2月25日(2日目):

- ・ HIPAA テスト受験
 - …アメリカの薬学生が実習に行くために合格する必要がある患者情報保護に関する理解度テスト。全員合格した。
- ・ SOAP の意味の確認
 - …日本で習った SOAP の内容と大差なかった。
- ・ 抗てんかん薬に関する講義
 - …現役薬学部2年生のクラスの中に入って授業を受講した。
 - 講義形態は日本と似ているが机がイスについている小さいものしかなく、皆その小さな机に大半がパソコンを置き、授業中にメモもパソコンに残していた。
 - てんかんについて薬理、動態を学んだ。日本で学んだことと大差はなかったが、日本では聞いたことのない薬効成分名がいくつかでてきて、アメリカのほうが承認されている薬効成分が多いことを感じた。

2月26日(3日目):

- ・ 初回面談での確認事項、服薬指導時の確認事項
 - …特に日本との違いを感じた事項は、患者の理解度テストをすること、締めくくりに要点について端的なまとめをすることであった。その理由として、十分な教育を受けていない人も多いためできるだけ単純に伝える必要があることがあげられる。
 - また、アメリカでは飲酒歴が最も重要視され、どうしても飲酒をしたい患者には車等でかけるような用事が何もなく家にいるときは飲んでみて様子を見るようにアドバイスする。
- ・ 抗てんかん薬に関する講義、偏頭痛に関する講義
 - …現役薬学部2年生のクラスの中に入って授業を受講した。

日本と異なり疾患別で講義があり、一つの疾患について集中的に概要、要因、疫学、治療法、薬、予防法、薬物動態まで幅広い分野を学べて、理解がしやすいし、効率が良い気がした。

2月27日(4日目): クリニック訪問

2月28日(5日目): クリニック訪問

…メキシコ系住民の多く住む街のクリニックチェーン Altamed (デンタル併設型) を訪問させていただいた。

現地には調剤室とは別の個室に薬剤師1名と南カリフォルニア大学の実習生がいた。実習生はローテーションで様々なクリニックへ行く。

到着してすぐデンタルの操作方法を教えられ、しばらく一人の患者について調べさせられ、検査値はどうか聞かれ、なぜ今のような処方になっているか、その患者さんにしてあげられることは何か聞かれた。

デンタルの操作方法は日本で病院実習のときに操作させていただいたデンタルと似た要領ででき、デンタルで見られる項目も似ていた。検査値が日本の単位と違っていて見てもわからない項目もあった。(HbA1c等)

慢性疾患の患者さんがほとんどで薬歴を見ても、たくさんの種類の薬を服用している患者さんが多かった。

患者は薬剤師に予約をしてきた者は薬剤師の診察を、医師に予約をしてきた者は医師の診察を診察室の個室で待ち、そこへ薬剤師又は医師が行って、服薬指導等を行うシステムになっていた。

薬剤師は検査値の確認を行い、処方は今のままでよいか、用量や薬の変更をする必要があるか、その場で判断し、医師への相談はなくとも処方を変更し、処方箋を発行することが出来る。

スペイン語しか話せない患者が多く、クリニックに勤めるカリフォルニアの薬剤師はスペイン語が話せないと勤まらない。

実習生は薬剤師の監督下ではなくても服薬指導が出来る。

患者の待つ診察室へ服薬指導や初回面談に向かう薬剤師の先生、実習生に何度か同行させていただいたが、初回面談では生活リズムや食生活などについてかなり詳しいところまで聞いていた。また、ほとんどが糖尿病患者であるため食べるものについてはフルーツは可だがジュースは不可、魚や鶏肉は可だが牛肉は不可などかなり詳しくアドバイスをしていた。

2週目

3月4日(6日目):

・病院見学

…栄養剤の混合などは無菌ではない部屋で無造作に行われていた。ほとんどの点滴に塩酸バンコマイシンを入れていた。

24時間薬剤師が常駐しているメイン薬局が1つ、サテライト薬局が各階に設置されている。

ピッキングは pharmacy technician が行う。pharmacy technician は免許が必要

であり、2年毎に更新する必要がある。

・保険薬局

…薬剤師が2人なのに処方箋枚数800枚/日と非常に忙しい薬局にお邪魔した。

錠剤のピッキングマシンが設置されていた。

錠剤はヒートではなくボトルで出てきて、ボトルには患者の希望する言語で名前、薬名が印刷されたシールが貼ってある。

薬は28種類ずつオリコンで届く。

アメリカでは一度の処方箋発行で再調剤が4回まで可能で、20~30%は再調剤の患者さんである。

処方箋の受け取りには4種類あり、手渡しかFaxか電子処方箋か医師からの電話であり、電子処方箋が最も一般的である。

棚卸しは1ヶ月に1回行われる。

3月5日(7日目): がんセンター見学

…アメリカでも胃がんが最も多い。

がんセンターの中にラボがある。

ターミナルケアはホスピスで行い、病院は治療をする場所との位置づけ。

オピオイドは血中濃度で表せないからfaceスケール等で調節する。

レジメンは1日にかかる薬の費用が莫大であるため患者に決めてもらう。

無菌室では16人くらいの薬剤師がケモ調製を行い、2人が調製が間違いないか確認する。

3月6日(8日目): ホメオパシー(ハーブ専門薬局見学)

…サンタモニカで1944年から70年続く薬局にお邪魔した。

ハーブの薬の処方箋もある。

良いハーブは味がひどいが、錠剤なら飲みやすいということから、漢方においてもほとんどが錠剤だった。舌下液剤なども少数ではあるが置いてあった。日本でも親しみのある漢方薬も置いてあったが、日本でよく見る散剤はなく、錠剤であった。アメリカでは漢方よりもハーブの方が親しまれており、置いてある薬の種類からもそれが顕著にわかった。

アメリカの薬学生はハーブについて学ぶ授業がある。

ハーブ専門薬局には髪の毛、爪、体重、体力に悩む人等いろいろな人が来る。

おいしいジュースのような抗菌薬や整腸剤、アレルギーが治ると謳った薬など日本では全く見たことのない興味深い薬が多くあった。

ホメオパシーとは自己免疫治癒力を高めるといような意味だった。セルフメディケーションを行う上には必要な考え方であると思った。

3月7日(9日目): クロージングパーティー